水の都おおがき
短編小説コンクール
優秀作品集　二〇二三

令和5年度　第3回
水の都おおがき
短編小説コンクール
優秀作品集　二〇二三

大垣で結ぶ（水の都おおがき 短編小説コンクール選評）

審査員長　中村 航

奥の細道むすびの地・大垣というのは、子どもの頃から慣れ親しんだフレーズだったから見逃していた。結びの地、というのは、考えてみればとても美しい言葉だ。

結ぶ、という言葉には色々な意味があって、例えば東北への旅も結ぶし、紐と紐も結ぶ。握り飯も結ぶし、約束や同盟も結ぶ。努力も実を結んだりするし、口をへの字に結んだりもする。小説や論も、必ず結ばなければならない。

最優秀賞に選んだ「あなたと笑顔を結びたい」は、この短い小説の〝結び〟が、とても美しく、印象的だった。

ラストシーンの場所は、奥の細道むすびの地記念館だ。主人公はアイドルを追いかけていた思い出や、曖昧だった恋を、この地で（笑顔という形で）結ぶ。同時に彼女と約束を（笑顔という形で）結ぶ。そして小説も結ばれる。

小説の序盤から、小旅行はゆっくりと進み、思い出も少しずつ明かされていく。答えの出なかった青春や、答を出さなければならない恋が、最後の最後で美しく結ばれる。最優秀賞に相

応しい、素晴らしい構成と内容だった。
個人的に感心すると同時に、冒頭に書いたように、〝結ぶ〟という言葉に思いを馳せることになった。奥の細道むすびの地である大垣で、何かを結ぶ。大垣をアピールする際のヒントを貰った気分だ。
優秀賞「さいかいの夜」は四年ぶりに通常開催された揖斐川（いびがわ）の花火を通した、親子関係の修復の物語だ。
どほん、どっほん、という花火の擬音が、とても可愛いのだが、そういう〝どうでもいいこと〟が、親子関係の悪化の象徴となっているのが、坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、という言葉の通りで、とてもリアリティがあった。またこの修復も、四年ぶりの通常開催だったからこそ起きた奇跡と思わせるし、この先、来年も再来年も、と言及されるところも、長かったコロナ禍を経た我々の今後への祈りに通じていて、気持ちの良い作品だった。
佳作「散歩道」は、母親との葛藤や将来への迷いを、祖母との交流が紐解いてくれる、という内容だった。捻りや作為の少ない小説だったが、祖母の優しさや語られる戦時中の話に心を打たれた。多くの人の目に触れてほしい作品だと思う。

以上、選考には、樋口健司先生と天岡久美子先生に協力いただき、両先生には深く感謝の意を表したい。以下、最終選考には漏れてしまったが、一次選考を通過した八つの力作についても短く触れさせていただく。全体に、擬人化ものと、水饅頭ものが多くて、それらをテーマにしたものは割を食ったかもしれない。
「茶人と武将」は、最後まで選に残そうか迷った次点とも言うべき作品。歴史ものとして文章力が高く、内容も面白かった。茶人なりの戦い方に迫力があって、自分の知らない世界を教えてもらった気分だ。
「宿縁と邂逅」も同じく歴史物で、関ヶ原合戦における大垣での人間ドラマ、とでも言うべき内容で、とても面白かった。ラストがやや、物語を消化しきれずに終わってしまった印象だった。
「水饅頭はキスの味」は、まずタイトルに持っていかれた。奇をてらったそのタイトルも素晴らしいが、自分が水饅頭になってしまう、というアイデアも秀逸で、水饅頭同士が過去を語り合うのも面白かった。ライトな文体は良いのだが、もう少し推敲が必要だったかもしれない。
「その音は」は、同じく主人公がペン壺というのが、アイデアとして秀逸だった。展開も小気味よくて、爽やかなラストも素晴らしい。ただ大垣との関連性が薄かったのが、惜しかった。
「百五十五歳の小袖」も、主人公が小袖（きもの）である、というアイデアが面白かった。その歴史もリアリティがあって素晴らしい。視点が少しブレるところがあり、小袖の視点で全てが書かれていたら、もっと良くなったと思う。
「最後の恋〜大垣ラブソング」は、ギター弾きの女性の一途な思いが伝わってくる良い小説だった。恋の進展が、じれったくて良いのだが、二人の間の障害や葛藤がもっと描かれていれば、さらに感情移入できると思う。
「みずを向ける」は、水饅頭が重要なアイテムとして出てくる小説で、水饅頭をスーパーで買う大垣ではない場所からの、大垣への視点が面白かった。ラストがとても良かった。
「水の宝石」は甘い恋愛小説で、その甘さが登場する水饅頭と相まって、楽しく読めた。個人的には嫌いではないのだが、読む人によっては甘すぎる、という印象を受けるかもしれない。

目次

最優秀賞　あなたと笑顔を結びたい　……縫野裕知　1

優秀賞　さいかいの夜　……渡邉そよ香　9

佳作　散歩道　……川島太一　17

最優秀賞

あなたと笑顔を結びたい

縫野裕知

大垣駅の南側ロータリーに小型のハッチバック車を停めた。他にも何台か停まっているが、人を降ろすとすぐに走り去っていく。祭りなどのイベントでもなければ、休日の午前中は名古屋や関西方面へ向かう人を送る車ばかりで、僕のように迎えの車は少ない。

大垣駅には、ＪＲ東海道線のほか、樽見鉄道と養老鉄道が乗り入れている。樽見鉄道は大垣駅から本巣市の樽見駅を、養老鉄道は揖斐郡揖斐川町の揖斐駅と三重県桑名市の桑名駅までを、それぞれ結んでいた。

そのどれかが停車したのだろう。人がまばらに吐き出されていく。カーナビに目的地を入力しようとしたところで声をかけられた。

「お待たせ。お迎えありがとう」

ドアのロックを解除した。もう付き合って一年になる涼子が顔を覗かせた。

「初めての大垣だよ」

そう言いながら助手席に座って、シートベルトを締めている。艶やかな長い髪が揺れた。

「寂れているってわけではないけど、どこか落ち着く感じがするね」

街の静けさに合わせるように、僕はアクセルをゆっくりと踏みながら、ロータリーを回って南へ車を進ませた。すれ違う人の多くは、駅へと向かう。

「有名なものって何かあるのかな？　お土産とか買いたいなぁって」

「今通り過ぎた和菓子屋とかは有名だし、水まんじゅうとかもいいかもね」

涼子は岐阜県の中濃地区に住んでいる。中濃地区の西に、岐阜市や各務原市などのある岐阜地区があり、そのさらに西が西濃地区で、そこに大垣市がある。大垣から中濃へ直通する電車はない。高校の学区も大きく異なることから、特別な事情がない限りはあまり訪れる機会はないようだった。

僕は岐阜地区に生まれ育った。高校も大学も東を向いて通い、そのまま地元で就職をした。そのため、本来であれば大垣には明るくない。この町に来るのも久しぶりだった。

県道５７号大垣停車場線を南下する。右側にも左側にも建物が並ぶ。しかし、名古屋のような都市部とは異なり、決して背の高い建物ばかりではない。見える空の面積は多い。商店街の歩道は、半透明のアーケードによって太陽の光が遮られている。いかにも地方都市らしい高屋町の街並みが広がっていた。

新大橋の交差点で信号が赤くなって、ブレーキを踏んだ。東を見る。新大橋は水門川にかかる橋で、欄干は茶色い。橋の中腹は歩道が少し広くなっていた。

「何を見ているの？」

「うん。昔ここに来たなぁって」

「何年か前に大垣で地下アイドルの追っかけをしていたって言っていたもんね」

「ご当地アイドルね」

地下アイドルとご当地アイドルはよく似ている。数人から数十人程度のオタクと呼ばれる固定ファンが、ライブ会場などに足繁く通う。唯一の違いが、公認か非公認かに関わらず、特定の地域をＰＲするアイドルとして、地域の祭りなどのイベントへの出演があることだった。そして、その地域貢献がアイドルにとっても、追いかけていた僕たちにとっても、アイデンティ

ティになっていた。
「あの橋から川を背景に、一緒にチェキっていう写真を撮ってもらったりしたよ」
一枚千円でチェキを撮ってもらう。そのチェキにサインなどを書いてもらいながら短時間のお喋りができた。推しと言われる贔屓のアイドルと少しでも長く過ごすために、何枚も撮影を依頼した。そのたびに、推しの短い髪と歯茎までよく見える笑顔を独り占めできるような気がした。
信号が青色に変わった。またゆるやかに車を走らせた。
「右側には、大垣城や大垣公園があるよ」
そうは言ったものの、県道からは入り組んでいて見えにくい。涼子はキョロキョロと眺めているが、よくわからなかったらしい。何も言わずに座り直した。
「段々と背の高い建物がなくなってきた」
郭町の交差点で、涼子が呟いた。
このあたりが月に一度のイベントの終点だった。毎月第一日曜日に駅からここまでが歩行者天国になる。フリーマーケットなどの出店のほか、ステージショーがあった。
イベントの都合で、新大橋ではなくこの路上が臨時ステージやチェキの撮影場所になることがあった。駅から離れるほど賑わいは少なくなって、アイドルとそのオタクだけが、隔離されたような複雑な気持ちになったことを思い出した。
信号が変わって、さらに南進する。右側に新しく建った市役所が見える。俵町に入ったところで、西へ入る。新大橋の下を流れる水門川を再び越えて、お目当ての店へ着いた。
「あっ、ここ。ＳＮＳで見たお店だ」

涼子が一度食べて見たかったというケーキ屋だった。いかにも女性が好みそうなお洒落な古さが良い雰囲気を醸し出している。
軋む階段を登ると、いくつかテーブルが置かれ、既に二組のカップルが座っていた。僕たちもその一角に腰を下ろした。
「落ち着いた空間で、すごくいいね」
この近くの奥の細道むすびの地記念館の前でも、月に一度イベントがあった。基本的には第一土曜日だったため、土日は連続して大垣を訪れていた。複数台のキッチンカーが並び、簡単なステージショーがあった。そこでライブが行われていた。通うことで仲良くなったオタクたちと、ライブ前にこの店へ来たことがある。店に不釣り合いな客層が次々と入り、きっと店員は驚いたことだろう。思い出して、思わず苦笑いがこぼれた。
「ここにも来たことがありそうだね」
「女の子とじゃないよ」
「そんなこと聞いてないよ」
悪戯っぽい笑顔を浮かべている。
注文したチーズケーキとコーヒーを楽しみながら、この一週間のことを話した。二人は実家に暮らしているため、休日だけ会う生活が続いている。毎日携帯電話でメッセージのやりとりはしているが、多分、十分には伝わっていない。この関係が煩わしい。年齢的にもそろそろ一緒になりたいが、なかなか言い出せなかった。
「美味しかったね。じゃあ、次へ行こうか」
ひと通り会話を終えて、また車に乗り込んだ。次は奥の細道むすびの地記念館を目指す。記

念館のすぐ北側に駐車場があったはずだ。
北側の駐車場は空いていた。駐車場を出て、そのまま記念館に入って見学をした。
「お土産も売っているのね。ちょっと見ていきたい」
イベントの途中で、暑い日はこの土産物屋で涼をとり、地元の水やその水を使ったサイダーを買ったことがあった。
「大垣って枡の生産がすごいんだね」
香りのいい枡が並んでいる。涼子はそのひとつを手に取りながら言った。推しのサインの入った枡を、クリップなどの小物入れとして今でも使っている。
外に出て駐車場まで戻る。その間の広場の西側に「むずびの泉」と書かれた石碑があった。フェンスで囲まれ、その中で湧き水が汲めるようになっている。
「本当に地下水が豊富なんだね。水都って言葉もしっくりくるね」
涼子は階段を下りて、湧き出た水を手で掬った。冷たいと言ってはしゃいでいる。
「ねぇ、今日は来たことのあるところばかりで退屈だった?」
手を拭きながら、涼子がこちらを向いた。
「退屈ではないよ。懐かしかった」
「懐かしくなるくらい、この土地に思い入れがあるんだね」
記念館の前の広場を見た。この場所で行われていたステージショーの最後が、アイドルのライブだった。子どもたちにとっては有名でもないアイドルのステージは退屈で、懸命に歌う彼女たちのすぐ脇を通って、次々に帰っていく。キッチンカーも店じまいを始めている。その光景が目に浮かんだ。

それでも彼女たちは歌い続けた。しかし、三年間の活動をもって、静かに解散した。毎月のイベント出演の甲斐もなく、いつもいるオタクたちだけの前で卒業ライブを披露して、僕たちの前から消えていった。
「あの子たちの頑張りは、何か意味があったのかな」
僕は聞こえないくらいの声で呟いた。
「追いかけていたご当地アイドルのこと?」
聞こえていたらしい。何も答えずにただ頷いた。少し間が空いてから涼子が言った。
「いつもだったらカーナビを必ず使うのに、今日はまったく使わなかったね」
何度も足繁く通った街だ。毎月、推しに会うために。だから久しぶりの大垣でも、迷わずに進むことができた。
「それが答えじゃない?」
涼子が笑顔で答えた。
「ほら、少なくともここにいる一人は、大垣に詳しくなった。住んでいるわけでもない、学校や職場があるわけでもないのに、忘れられないところになった。そして、その思い出の場所に私を案内してくれた。私にも伝播していく。それだけで意味のある活動だったんじゃないかな」
歯茎がよく見える、あの懐かしい笑い方だった。風が吹いて、泉の水面に波紋が広がる。涼子の髪が揺れた。ほんの一瞬だけ僕が追いかけていたあの子の短髪に見えてから、今追いかけている長い髪に戻った。
「僕と同棲してほしい」

この土地から生まれたアイドルが、オタクだった僕の背中を押して、笑顔を結ぶ。

優秀賞

さいかいの夜

渡邉そよ香

どほん。どっほん。
花火の「音」なら、どほん。どっほん。
小学五年生の夏まで、当たり前にそう思っていた。実際、母の耳にも、私の耳にも、そう聞こえていたはずの夏の風物詩。
コロナ禍を経て、今年の大垣花火大会は揖斐川河畔で四年ぶりに通常開催されるらしい。
近頃めっきり人の名前が思い出せなくなったのに、花火と聞くだけで、なぜかあのことは思い出せてしまう。そんな自分が忌々しい。

小学五年生の二学期初日。先生が一人ずつ夏休みの思い出を発表させた。
あの夏のベストメモリーは、間違いなく大垣の花火大会だった。河畔で見る初めての花火。心臓に直接入り込んでくる音と振動。家の近所で遠くにあがる花火を見ながら聞いていた音とは、まるで違った。恐怖と興奮が私の体の中を巡った。
つないでいた母の手だけが頼りだった。母が汗で握り変えようとするのさえ拒んだ。手をつないでいなければ、うまく歩けないくらい、私は花火の音に心臓を射抜かれていた。
だから、学校で夏休みの思い出を聞かれたら、必ず花火大会の話をすると決めていた。
次は私の番だ。やっと話せる。すると花火の「音」について語る私を遮って、こらえきれずに、斜め前の丸坊主がふいた。体を前後に揺らし、机を叩いて大声でガハハと笑った。

「どっほん、だってよ！　どっほーん」
クラス中もつられて笑った。急なできごとで、私は声を出すことも、泣くこともできず、ただただ硬直した。そして後悔した。
今まで母を疑ってこなかった私はバカだ。その日から「どっほん」は封印し、そう教えた張本人の母を恨む人生が始まった。

私の人生に花火は存在していない。六十歳になった今でも、花火なんてものは、数回程度しか見た記憶がない。見たくもない。
花火と母。同じくらい嫌忌な存在なのに、なぜか六十年も、私は母と暮らしている。
母は、今日も足が痛くて立てないと言う。
「で、私にどうしてほしいの？」
「言ってみただけ。この年にならんと、私の辛さはわからんのやで」
今はいい。どんなに愚痴を言っても、まだ自力で動けるのだから。でもいつかは、ひたすら愚痴と要望は言うのに歩けない母になり、母のあれこれを世話する私になる……。
私は、いずれ来るであろう老老介護の日々に気づかないふりをして、今を生きている。
何十年も前から手さえ握ったことのない母の、着替えや下の世話が毎日できるだろうか。私たちは、そんなことが簡単に受容できる親子ではない。母ひとり子ひとりなのに、我ながら恐ろしいほどドライで薄情だと思う。
「今年は、花火あるんだねぇ。大垣の花火、何年なかったんかねぇ。どこであるんかな」

「新聞見ながら話しとるんやで、そこに書いたるやろ？」
「字が小さいで、見えんわ。読んで」
また始まった。こうやって、母はいつも私に記事を読ませようとするが、私だってもう六十。老眼鏡なしで読めるような視力ではない。もう同級生には、孫だっている年齢なのだ。
私が新聞記事を読み終えると、母は、
「そうですか。今日大垣の花火あるんですね」
と言った。嬉しそうでも、寂しそうでもない、方言の混じっていない言葉が、少しだけ耳の奥に違和感を残した。

連日の猛暑で、夜になっても気温が下がらない。今日も七時半を過ぎて、辺りは暗くなっているのに、日中と変わらず蒸し暑い。
こんな中を、花火を見に行く人の気がしれない。休日の夜は、テレビとビールに限る。
「ねぇ、花火、連れて行って」
気のせいだ。
「ねぇ、花火、連れて行って」
無視してみた。
「もういっぺん、花火観たいで、連れて行ってくれん？」
腰の曲がった八十五歳のおばあさんが、人混みの中の花火？　無理に決まっている。足元がよく見えないから危ないと諭した。
「……やけど、さ、あと何回花火拝めるかわからんよ。あんたも私も年なんやから」

確かに、母だけでなく、私もいつ何が起きてもおかしくない年齢だ。母はそれなりに私の年齢も理解しているようだった。
「ねえ！　花火見に行かへん？」
遠くから花火の音が聞こえ始めた。
「ねえ！　花火見に連れてってもらいたいなぁ」
何時に終わるかはわからないけれど、もたもたしているうちに終演となりそうだ。今行かなければ、しばらくは繰り返し、連れて行ってもらえなかったと愚痴を言うだろう。
「じゃさ、少しだけね」
そう言ったものの、玄関脇の車に乗るまで、相当時間がかかる。すでに私は後悔した。
ゆっくりゆっくり進む母は、背むしで丸く小さくなって、手足だけ細く伸びている。まるでアニメ映画に出てくる、小さな頭だけのモンスターのようだ。モンスターが、二十年ほど前からある、裾の広がったピンクの花柄ブラウスを着ている。
そういえば、できたばかりのショッピングモールに一緒に買いに行ったっけ。当時はこんなに派手なものをとからかったが、今ではこんなに古いものをと思う。
よっこらしょと、小さなモンスターは、嬉しそうにシートに座った。やれやれ……。
三軒先の家の前からは、田んぼが広がっていて、アウトドアチェアに座り、そこから見える小さな花火を楽しんでいるご夫婦がいた。
花火に向かって、市道を走っていく。
「今、聞こえたよ。花火」
「本当や！　どほんと、聞こえる！　ファーマーズのところから、通りに出たら、花火、見え

るんやないかな！」
母のリクエストに合わせて、大垣環状線を東に走ることにした。東中之江川を渡るときは陸橋になっているから、離れていても花火が見えるかもしれない。
ジェットコースターがスタートラインに向かって進むように、ゆっくりとしたスピードで、陸橋を上がっていく。歩道では大勢の人が花火を見ていた。
「わぁ、見えた見えた！　どっほーん」
花火よりずっと母の声の方が大きい。確かに陸橋の頂上からは花火が欠けずに真正面に見えた。ただ、上がれば下るので、結局花火がきれいに見えたのは、数発だけだった。
「車から降りんでもいいわ。だから、もう一回ぐるっと回って！」
大垣環状線を花火に向かってゆっくり走らせると、そのまま何発も拝めた。
「車の中から見る花火は、極楽やー」
ぐるりと市内を回り、再度ファーマーズまで車を走らせる。八十五歳の少女が花火ドライブを楽しんでいる。だんだんと終演が近づいてきたようで、二度目の東中之江川の陸橋で、金色のしだれ柳が見えた。大きな音でどっほーんとまたゆったわ、と母が手を叩いた。少し間をあけて、スターマインも見えた。
「じゃ、帰るよ」
私は、それ以後無言で車を家路へと走らせた。

「ねえ、コンビニ寄って。アイス欲しなった」
無言で走り、コンビニの駐車場に止めて、握力の弱くなった母のためにドアを開けた。

母が突然私の腕を握り、もう片方の手で、私の手を握った。暗い中、降りるための支えだろうから、振り払うわけにもいかず、結局手をつないだまま、二人でコンビニに入った。
母は嬉しそうに、冷凍庫を眺め、ソフトクリーム型のアイスを二つ選んだ。そういえば、久しく一緒に買い物には来ていない。足の運びがおぼつかないので、自分で買い物に行くこともほとんどなかった。
会計をしていると、入口から、アウトドアチェアで花火を見ていた奥さんが入って来た。
「あれま、こんなところで。花火終わったねぇ。さっき、花火見とらっせたね、角で。私らも、花火見てきたところやよ。どほん、どほんと、音が聞こえるの。年寄りになっても、ちゃんと音が聞こえるくらい、花火の音は大きいんやね。近くは、よう見えたよ。久しぶりやったで、アイスクリーム、娘に買ってもらったの。喉が渇くでね、アイス好きやで。あと何回花火拝めるかわからんでね」
母はひとりで喋り続けた。全くキャッチボールにならないマシンガントークだった。
私は母の手を引き、奥さんに謝って、店を出た。車に乗るとすぐに、母が車の中でアイスクリームを食べようと言った。二人で溶けかけたアイスクリームを食べた。
「昔、あんたと花火を見に来たとき、アイスクリームが河畔で売っててさ。喉が渇いたから買ってほしいって言われたんやけど、その時は買ってやれんくて悪かったね。なんや、そのこと思い出して、あんたとアイスが食べたくなったんやて。払ってもらっとるけど」
そう言って、母はペロリとアイスをなめた。
きっと、小学五年生の時の花火大会のことだ。あの時以来行っていないから。私は花火音の大きさと、母とつないだ手のことしか記憶がなかった。アイスクリームか……母の中には、そ

れが記憶として残っていたのだろう。

二人の花火の記憶は、半世紀を過ぎて、今日やっと上書きされた。

そしてもう一つ、私は確信した。母はマイペースな人だ。きっと長生きするだろう。来年も再来年も、十年後だって花火に行くだろう。私もかな。ひとりじゃ行かせられないし。

しわしわな母の手を引きながら、足元を照らして、私はゆっくりと玄関のドアを開けた。

佳作

散歩道

川島太一

「さて、そろそろ散歩にでも行ってくるかね」
そう言いながら栄(さかえ)は身支度を整え始める。リビングで本を読んでいた梓(あずさ)はその声に反応し、顔を上げた。
「おばあちゃん、私も一緒に行きたい」
「ええよ、あんたも来(こ)やあ」
平成十二年八月、就職して三年目の夏、梓は盆休みで大垣に帰省していた。土日も含めて一週間程の滞在だったが、何かと忙しく過ごし、東京へ戻るまで残り二日となっていた。
「いつもの散歩道でいいかね」
二人は揖斐川(いびがわ)に向かいながら青々とした田んぼ沿いを歩く。
「ここら辺も新しい家増えたね」
梓が小さい頃は数軒しかなく、周りは田畑ばかりだった。しかしここ数年、新興住宅が増えてきて、移住者も多くなってきた。
「そうやねぇ、どんどん変わっていくな」
栄は齢七十、健康のために畑仕事と散歩が日課になっている。梓は幼い頃から祖母が大好きで、いつも後を付いて回っていた。手先の器用な栄は裁縫が得意で、梓によく洋服や小物を作ってくれた。その影響を受け、梓も洋裁の専門学校を卒業し、今はアパレル関係の会社で働いている。

田んぼを過ぎると、小さく短いトンネルがある。いつ見ても薄暗く、古びた外観だ。中に入って見上げると、小さなレンガが螺旋状にねじって積まれている。梓はここを通るたびにトンネルに吸い込まれそうな感覚に陥る。
「このトンネルはな、ばあちゃんよりもずっと年寄りなんやよ」
栄はいつもそう言って笑う。あっという間にトンネルを抜け、右手に曲がるとすぐに揖斐川の堤防だ。坂を上り、振り返るとそこには大垣の街が広がっている。遠くに池田山や伊吹山があり、夕日が少しずつ山の向こうに沈んでいく。大小様々な家やビルがミニチュア模型のように並んでいる。背の高いスイトピアセンターも見える。小さい頃から栄と一緒に散歩をしていた梓はここから見る大垣のまちの景色が大好きだった。堤防の上は少し風が強かったが、梓には心地よく感じられる。そして大垣の東の端にはもう一つ、梓が行きたい初めての場所があった。
「おばあちゃん、橋に行こう」
梓は祖母の手を取り、その先へ向かう。そこには、大きな揖斐川の上に架かる橋があった。旧揖斐川橋梁、この二月に歩行者と自転車用となったが、元々は明治時代の幹線鉄道用の橋だ。当時としては最大級かつ最も高度な技術を駆使して作られたという。昔と変わらず多くの柱が縦横斜めと橋を支えており、そのバランスとデザインは芸術的とさえ思える。橋のすぐ横にはもう一つ、鉄道用の橋があり、河の上で電車が走るのを見ることができる。この春先から栄の散歩は橋の向こうの安八郡まで行き、折り返して大垣に戻ってくるというのが定番のコースとなっていた。橋の真ん中に来ると下に揖斐川が緩やかに流れ、晴れた日には遥か遠くに飛騨の山々を臨むこともできる。梓は初めて歩いて渡る橋の景色を最初は興味深げに見ていた。橋の

真ん中まで来ると梓は栄の手そっと離し、近くの手すりにもたれかかる。少しの時間、言葉少なく浮かない表情の梓に栄が声をかけた。
「梓ちゃん、ばあちゃんになんか話したいことあるんやろ」
「……うん、ある」
「言ってみ。聞いたるで」
梓は躊躇いながらも少しずつ話し始める。今の会社は仕事も楽しく、やりがいもあるが、自分の能力や知識に限界を感じていること。そのためデザインの勉強をしにイタリアへの留学を考えていること。しかし、帰省前に母の幸恵に電話でその話をしたところ、仕事ではなく、周りの子たちと同じように結婚や子育てを優先してほしい、海外なんてもってのほかと真っ向から反対されて、そのまま話ができずにいること。そのため、この帰省中も母とは最低限の会話しかしていなかった。
「せやから幸恵が機嫌悪かったんやね。あんたが帰ってきて嬉しいはずやのに、なんでかなぁと思っとったんよ」
栄はようやく事情が分かったというように、そっかそっかと頷いた。
思春期の反抗期はあったものの、梓は親の言うことは極力聞くようにしてきた。それは反抗して親を悲しませたくなかったからなのかもしれない。けれど親元を離れ、仕事をしていく中で、自分のデザインを多くの人に見てほしいと思う気持ちが出てきた。と同時に新しい世界や環境に身を置いて勉強をしたいと考えるようになった。海外に行くことに対する不安や結婚や出産への焦りがないと言ったら嘘になる。「でも……」と梓は続ける。
「私、ここで頑張らないと一生後悔する。この仕事好きだからずっとやっていきたい。ただお

母さんが悲しむのも嫌なの……。もうどうしたらいいか分からなくて……」
梓の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。栄は梓の背中に手を置き、優しくさする。
「そうやったんやね。ずっと辛かったな。……梓ちゃん、ばあちゃんの話、ちぃっと聞いてくれるか」
「……うん」
「ばあちゃんもな、昔、あんたみたいに裁縫で仕事したいと思っとったんよ」

昭和二十年、十五歳だった栄は大垣女子商業学校に通い、将来は得意の裁縫で生計を立てるつもりだった。学校帰りによく堤防に来ては大垣の街を見下ろし、明るい未来を夢見ていた。しかし、その年の三月に大垣は米軍から初めての空襲を受け、戦火はすぐそこまで押し寄せていた。それから夏までに四度の空襲を受け、その日がとうとうやってきた。
七月二十九日の夜、突然空を切り裂くように警報が鳴り響いた。
「空襲じゃ、早く家から出ろ」
明かりもない中、栄たちは防空頭巾を被り、少しの荷物を持って外に出る。遠くに爆撃機が飛ぶ音が聞こえる。
「よそ見しとらんと早く逃げえ」
家族に急かされ防空壕を目指してひたすら走る。しかし爆撃機は栄たちには目もくれず、どんどん通り過ぎていく。近くにいた近所の人が呟いた。
「すごい数の爆撃機じゃ。街が……大垣の街がやられるぞ」
遠くで爆発音がしている。栄は突然堤防に向かって走り出した。

「栄、どこ行くの」
慌てる家族を置いて、暗闇の中、何度も転びながら栄は一心不乱に走り、小さなトンネルを抜け、揖斐川の堤防に立った。息を切らしながら見た先にいつもの風景はなかった。街の中心部でどんどん火の手が上がり、炎が大きくなっている。その炎の明かりの上で米国の爆撃機が空を埋め尽くしているのが見えた。黒い爆弾が連なってどんどん街に落ちていく。
「なんで……なんでこんなこと」
全てが燃えてなくなっていく光景を前に栄は自分の夢が消えていくような悲しみを感じた。後を追ってきた栄の母は静かに泣きながら立ち尽くす娘を無言で抱きしめ、二人で炎に包まれる大垣の街をずっと見ていた。
「あの場所に立つと、あの夜のことをいつも思い出すんよ。……それでもあそこから見る景色が昔から一番好きなんやよね」
そう言って微笑む栄の手を梓は強く握る。
「あの後すぐ終戦になって、そこからはとにかく生き抜くのに必死やったね。結婚して幸恵を産んで育てて、自分のことは全部後回し。そういう時代やった。……時々思うんよ。あの戦争がなかったらって。自分で仕事して生きていけてたらって。でもあの夜の炎が全部焼き尽くしたんや。人に言う話でもやないから今まで黙っとったけど……でも、もう戦争は終わった。今は自分の夢を叶えられる時代になったんやよ。だから梓ちゃん、あんたは自分がやりたいことやり」
「おばあちゃん……」
初めて聞く祖母の戦争の話に梓は言葉が見つからなかった。

「お母さんにはばあちゃんから話しとくで」
「……ううん、私、もう一度、自分でお母さんに話す。おばあちゃん、ありがとう」
梓は栄の手をもう一度強く握り笑顔で言う。
「遅くなったから、家に帰ろうか」
二人はもう一度堤防に立つ。夕日に赤く染まる大垣の街を見て栄が呟く。
「そういえば、幸恵もここの場所が好きなんやよ。あの子が小さい時によく来とったからねぇ。……どんなことがあっても、やっぱりここから見る大垣の街が一番きれいやな」
「うん」
梓はその言葉に心の底から頷いた。

東京へ戻る日、駅まで送ってくれたのは梓の父だけだった。母には再度話したが、快く送り出してはくれず、梓の気持ちは沈んだままだった。別れ際の父は「お前の選んだことなら責任持ってやれ」といつものように淡々としたものだった。
大垣駅から豊橋行きの快速電車が動き出すと見慣れた景色がどんどん通り過ぎていく。
もうすぐ揖斐川に差し掛かろうとした時、栄と幸恵があの橋の真ん中に立っているのに気づく。その手には「梓がんばれ！」と大きく書かれた画用紙があった。梓は思わず立ち上がり、二人に向かって大きく手を振る。すれ違う一瞬に、『が・ん・ば・れ』二人の口が動いているのが見えた。橋が見えなくなるまで梓は手を振り続けた。
「なんなの、もう」
梓は笑いながらも様々な想いが込み上げてきて涙が止まらなかった。

「次は名古屋、名古屋に停まります」
車内アナウンスが流れる。涙を拭いて顔を上げた梓にもう迷いはなかった。イタリアに行って必ず自分の夢を叶える。そして今度は祖母と母と自分の三人で、大好きなあの場所から大垣の街を見ようと心に決めたのだった。

2023 年度の「水の都おおがき 短編小説コンクール」には、
52 点の応募作品が寄せられました。
入賞作品の表記は、原作を尊重し、それに従いました。

水の都おおがき　短編小説コンクール　優秀作品集　二〇二三

令和 6 年 2 月 23 日発行
＜監修＞　中村 航
＜編集・発行＞　（公財）大垣市文化事業団
大垣市室本町五丁目 51 番地
（大垣市スイトピアセンター文化会館 2 階）
TEL 0584-82-2310

＜ DTP ＞　七守 悠